

### 鹿の井出水の水争い

香川県高松市太田下町に幅 4m程、長さ 240m程の鹿の井出水（ですい）があります。この鹿の井出水の出水ざらえをめぐる、江戸時代から上流の多肥村と下流の伏石村の間で水争いが起こってきました。大正 13 年と昭和 14 年の干ばつ時のことをお伝えします。

#### ■大正 13 年の干ばつ

地勢上、上流の多肥村の浅層地下水が鹿の井出水に向かって流出するため、鹿の井出水の底ざらえを深くすると上流の出水や井戸水が枯れるという関係にありました。このため、出水ざらえが水争いの原因になりやすく、下流の伏石村が毎年春に一回だけ行う出水ざらえには厳しい水利慣行がありました。大干ばつとなった大正 13 年（1924）夏、追い詰められた伏石の農民たちは 8 月 21 日に鍬やジョウレンを持って、夜中に伏石神社に集まり、鹿の井出水に押しかけ、夜を徹して出水の底を深くさらえました。これを知った多肥村の農民は鍬を持って現場に駆けつけ、さらえた泥を出水に落とすなどしました。鹿の井出水では多肥村側と伏石側が土砂を投げ合い、怒号が飛び交うなど混乱しましたが、駆けつけた多数の警官によって紛争は一応収束しました。<香川県土地改良事業団体連合会編「香川県土地改良事業団体連合会 50 年史」2008 年など>



#### ■昭和 14 年の干ばつ

昭和 14 年（1939）は春の降雨が少なく、7 月～9 月に雨が降りませんでした。鹿の井出水の伏石掛 110 余町歩では水がなく、80 余町歩は各自所有の用水堀でかろうじて植え付けをしましたが、残り 30 町歩は何も作れなかったといえます。この大干ばつを契機に、鹿の井出水の伏石掛は鹿の井出水浚渫権確認等の請求について高松地方裁判所に提訴しました。年一回立ち会いのもと浚渫できるという古来の慣行を法的に解決することを目指したものでしたが、裁判は長期化し、戦時下、戦後の混乱の中で立ち消えのようになってしまいました。その後、内場ダムの完成と導水により昭和 33 年に慣行の一部が緩和され、昭和 53 年の香川用水の導水などを経て、昭和 55 年によりやく鹿の井出水の水利慣行が全面解放されることになりました。<多肥郷土史編集委員会編「多肥郷土史」1981 年など>

